

2005年度版小学校国語科教科書における古典教材採録のあり方

Adoption of Japanese Classics in the 2005 edition of Japanese Language Textbooks
for Elementary Schools

中嶋真弓 (Mayumi NAKASHIMA)

In February 2008, new elementary school curriculum guidelines were announced, and regarding Japanese language courses, the idea to “focus on Japanese Classics” was introduced. Up to now, Japanese Classics in elementary schools were centered on learning haiku and tanka (31-syllable poems). However, if Japanese Classics are to be officially adopted, there will be several things to consider, such as which textbooks should be selected and how to teach. Therefore, in this thesis, focusing on the 2005 edition of Japanese language textbooks for elementary schools, the type of materials included and their arrangement in the textbooks will be examined.

はじめに

2009年度からの移行措置を経て、2011年度から新しい学習指導要領の完全実施となる。国語科では、「古典に関する指導の充実」が打ち出されている。このような状況の中で、「小学校の古典教育」のあり方を明らかにしていくことは急務である。

本小論は、その足がかりとして、2005年度版小学校国語科教科書において古典教材がどのように採録され、位置付けられているかを見ていくものである。

1 小学校古典教育の現状

PISAの調査による「読解力の低下」、「ゆとり教育」による「学力の低下」等々で、学校教育のあり方や教育内容の見直しがなされているが、とりわけ、全ての教科の核である「国語科」の重要性は多くの場で叫ばれている。

現在、小学校国語科は、以下の目標¹で行われている。

「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。」（下線筆者による。）

下線部においては、次のような説明も付記されている。

「国語を尊重する態度は、言語能力と態度とが密接に関連し合いながら育てられていくものであり、国語を大切にし一層よいものに発展させようとするにもつながっていく。そしてそれは、言語を通しての自己形成、社会生活の向上、文化の継承発展などに欠かすことのできないものとなり、さらには、世界の様々な言語や文化に広く目を向ける大

切な手がかりともなるであろう。」²（下線筆者による。）

このような目標の中で、小学校古典教育は、第5学年及び第6学年を中心に指導がなされている。言語事項(1)には、「エ 文語調の文章に関する事項」があり、「(ア) 優しい文語調の文章を音読し、文語の調子に親しむこと。」とある。また、「優しい文語調の文章としては、韻文である短歌や俳句を含めた、読めば意味内容が容易に理解できる程度の易しい文章であるよう配慮することが必要である。」と記されている。さらに、「3 取り上げる教材の観点」の中には「ク 我が国の文化と伝統に対する理解と愛情を育てるのに役立つこと。」³とある。整理するならば、小学校古典教育は、第5学年及び第6学年の中で「短歌と俳句」を中心に学ぶことによって「我が国の伝統文化に対する関心や理解」を深めようとしていると言える。

「古典教育」というと、中学校・高等学校の学習ととられがちである。研究においても、小学校古典教育においては十分なされているとは言えない。

安居總子は、「異文化コミュニケーション時代の古典学習」⁴の中で、幼少期からの古典学習の重要性を次のように述べている。

「日本では、文語文に接することを嫌うが、また初めて文語文に出会う時期は考えねばならないが、漢詩に限らず文語文体の言葉—ことわざ、格言、俳句、短歌など—に幼少時から出会わせ覚えさせていくことを、もっと積極的にすべきではないか。近隣の国々とのコミュニケーションに資するためにも。」

また、大平浩哉は、「まず現代語で古典を」⁵の中で、小学校古典教育の必要性を次のように述べている。

「私のはかねがね、小学校の国語科で、児童向けに書き直した説話や物語などを教材としてたくさん読ませ、古典の世界に親しませるべきだと考えてきた。言語文化の継承は、国語科教育の大きな課題のはず。高等学校段階で古典に関心を持たせようとしても、時すでに遅し、の観がある。」

小学校古典教育について、その必要性が叫ばれながらも、十分議論されることもなく現在に至っているのが現状である。そのような中で、文部科学省は、小学校古典教育のあり方に本格的に着手し始めたのである。

2006年8月19日、次のような見出し、内容が新聞に見られた。

『『小学国語で古文検討』やさしい文語調の文章に親しむことを掲げた現在の指導要領よりも文化の継承を強調し、古典重視の姿勢を鮮明にした。改訂されれば全国の小学校で枕草子など古文や論語、漢詩などの漢文を暗唱する授業が実施されることになる。』⁶

そして、学習指導要領改訂に向けて出された文部科学省資料「審議のまとめ」「答申案」には、「小学校の古典教育重視」の立場を見ることができる。「学習指導要領案」に至までの経過として記しておくこととする。

○「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」（2007年11月7日）

・「教育内容に関する主な改善事項」

■伝統や文化に関する教育の充実

●国際社会に活躍する日本人の育成を図るため、我が国や郷土の伝統や文化を受け止め、それを継承・発展させるための教育を充実する必要がある。

●国語科での古典の重視

■小・中・高等学校の各教科・科目等の内容

●古典や近代以降の作品をはじめとした我が国の言語文化に触れて感性や情緒をはぐくみ、言語文化を享受し継承・発展させる態度を育てる。

○「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申案）」（2007年12月25日）

・「7 教育内容に関する主な改善事項 (3)伝統や文化に関する教育の充実」

●小学校の低・中学年から、古典などの暗唱により言葉の美しさやリズムを体感させた上で、我が国において長く親しまれている和歌・物語・俳諧、漢詩・漢文などの古典や物語、詩、伝記、民話などの近代以降の作品に触れ理解を深めることが重要である。

・「8 各教科・科目等の内容(2)①国語」

●古典指導については、我が国の言語文化を享受し継承・発展させるために、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成する指導を重視する。

「審議のまとめ」「答申案」を基に学習指導要領案が2008年2月公表された。

・伝統的な言語文化と国語の特質（学習指導要領案）

◎【古典】ことわざ、故事成語、伝説、古文・漢文の音読など古典に関する指導を充実。

「小学校古典教育」の充実に向けて、今後、今までの古典学習のあり方を見直しながら、教材の選定から単元の配列、言語活動例等々究明すべき事柄は山積している。

さらに、指導のあり方、「教科書教材」においては、中学校・高等学校との連携を今まで以上に系統的にしていく必要もある。

そこで、次項では、その改革の第一歩として、2005年度版小学校国語科教科書5社⁷において、古典教材がどのように採録され位置付けられているかを考察していくこととする。

2 小学校の古典教材採録のあり方

本章では、2005年度版小学校国語科教科書古典教材⁸の採録のあり方を、次の3観点で見えていくこととする。

(1)採録されている古典教材（ジャンルと作品詳細）

(2)古典教材採録の意図

(3)古典教材「短歌と俳句」のねらい及び提示の仕方

(1)採録されている古典教材（ジャンルと作品詳細）

5社の古典教材採録の状況を、《表1-①》のように整理してみた。また、「発展」として採録してある作品を《表1-②》（発展）に示した。なお、《表1-①》に整理した古典教材

は、「優しい文語調の文章」として採録されている詩歌作品（詩においては文語調の作品を、短歌と俳句は、江戸時代までのもの）、及び「親しみやすい古典の文章」と戯曲類として狂言に関するものである。

《表1-①》古典教材採録の状況

	1 東書	3 大書	11 学図	17 教出	38 光村
短歌と俳句	5 [5下] ◇短歌と俳句を味わおう			[5下] ◇いろはうたの世界	
物語		[6上] ◇短歌と俳句	[6上] ◇詩を讀もう ・短歌と俳句	[6上] ◇言葉と文化 ・短歌と俳句(宮 川柳)	[6上] ◇言葉のひびきを味わおう ・短歌・俳句の世界
狂言		[6下] ◇言葉の文化を受けつこう ・伊賀茶屋への招待 ～狂言と文楽～			
論語	5 [5上] ◇詩を讀もう		[5上] ◇詩を讀もう	[5下] ◇思いをこめて讀んでみよう	[5上] ◇詩を味わおう
	6 [6上] ◇表現の良さを味わいながら声に出して讀もう				

《表1-②》古典教材採録の状況（「発展」として採録している作品）

	1 東書	3 大書	11 学図	17 教出	38 光村
短歌と俳句	4 [5下] ◇百人一首			[4上] ◇芭蕉4句と一茶4句	[4下] ◇兼原秋を各2句
物語	5 [5下] ◇竹取物語(曹訳)	[5下] ◇竹取物語			
狂言	6 [6下] ◇小宮百人一首	[6上] ◇枕草子(第一段)	[6下] ◇俳句9句と短歌7首		
論語	4 [4下] ◇清水			[6上] ◇さるは「ココ」と叫んでいた(筆者補:文中に狂言の説明と写真)	[6上] ◇狂言「神山伏」の脚本と解説
論語	6 [6下] ◇「論語」の言葉			[6上] ◇「華境」(華境)	

《表1-①》により、5社ともが学年は違うが、「短歌と俳句」「詩(文語調の詩)」を採録していることが分かる。それ以外の古典教材では、[大書]「狂言」、[学図]「物語」が見られる。このように、小学校の古典教材の中心は、「短歌と俳句」だと言える。また、全ての児童が学習

する内容ではない「発展」を見ると、[東書]は、「竹取物語」「枕草子」「平家物語」「論語」や「狂言」といった「古典」の典型的な作品を網羅している。[教出][光村]においては、4年生で俳句に触れさせていることも分かる。さらに、[東書][大書]は、「百人一首」に触れさせている。「狂言」においては、[大書]の他に、「発展」として[東書][教出][光村]も取り上げている。「発展」に位置付けられた古典教材のあり方を見てみると、次の内容を見て取ることができる。①学年で学んだことを生かしながら広めるためのもの。これは、[東書]の「短歌と俳句」・「百人一首」や[学図]の[6上][6下]のつながりにみられ

るものである。これらは、授業時数の中で「短歌と俳句」を学習し、それを受けて「百人一首」や他の短歌と俳句で、よりそのおもしろさを学習するものである。②次の学年へつなげるためのもの。例えば、[教出][光村]に見られる[4年]から[6年]への俳句の系統性はこれである。③実生活への発展が期待できるもの。これは、[東書][大書]に見られる「短歌と俳句」と「百人一首」との関係である。

「発展」も含めて3社に採録されている「竹取物語」は、多くの場合中学校の古典で最初に学習する教科書教材であるが、それを小学校教科書に採録する意図（ねらい）について、それぞれの発行者は、次のように記している。

- ・[東書]: 物語を原文で読むことで、児童は古典作品を身近なものに感じる。⁹
- ・[大書]: 「竹取物語」は、誰もが知る古典文学を代表する作品である。(中略)もともと親しみのある物語であり、音読、視写を通して、その調子に十分慣れ親しむことができる。¹⁰
- ・[学図]: 使われている言葉遣い、仮名遣いの違いを知らせ、「文語」についての理解を深めさせようとしている。¹¹

「竹取物語」が、「かぐや姫」として子ども達に親しまれているという前提の基で採録されているのである。つまり、「子ども達に親しまれている」作品は、古典教材として効果的であるということである。幼いときに読んでもらった作品やカルタで行った百人一首が実は「古典」であるとなれば、「そうか。それならば知っている。」「やっていた。」となるであろう。「古典」として、構えて捉えるのではなく、逆の発想で、「身近な生活の中」「生

《表2-①》採録されている作品の詳細

古典教材として採録されている作品		採録社数
短歌	・東の野にかざろひの立つ見えてかへり見すれば月かたぶさぬ	柿本 人麻呂 3
	・石定る盆水の上のまむの薪え出づる春になりけるかも	志廣 童子 3
	・五月雨の晴れ間にいでて舞ねば曾田すどしく風わたるなり	良 寛 1
	・かすみたつ長き春日に子供ると手まりつきつこの日暮らしつ	良 寛 1
	・あまの原ふりさけみればかすがなるみかさの山にいでし月かも	安倍 仲麻呂 1
	・ねこの子のくびのすがねかすかにもおとのみしたる夏草のうち	大熊 書道 1
	・春さぎて夏来たるらし白砂のころもほしたりあまのかく山	持統天皇 1
	・田子の浦ゆうち出でて見ればま白にぞ富士の高嶺に雪は降りける	源人 頼朝 1
	・秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる	山部 山部 1
	・いろはうた(歌省略)	藤原 敏行 1
俳句	・閑さや岩にしみいる銀の声	松尾 芭蕉 2
	・古池や蛙預こむ水のおと	松尾 芭蕉 1
	・五月雨を兼めて早し森上川	松尾 芭蕉 1
	・雷とけて村一ぱいの子どもかな	小林 一茶 1
	・大橋引大橋で道き教へけり	小林 一茶 1
	・ひさの児の頬べたなめる小てみ教	小林 一茶 1
	・霧の花や月は東に日は西に	号前 彌村 4
	・月の夜や石に出て鳴きぎりぎります	加賀 千代 1
	・梅一輪一輪ほどの暖かさ	原野 風雷 1
	川柳	・芭蕉結ばちやんといふと立留り
・はへば立て立てば歩めの瓢心		1
・まだももは流れてこぬに子はぬ入り		1
・本降りになて出て行雨やどり		1
物語	・「竹取物語」:「今は昔、へいとうつくしうてあたり。」	1
	・「平家物語」:「春一、かぶらぎとって〜ひいふとぞ討切つたる。」	1
狂言	・さるは「ココ」と鳴いていた(筆者注:文中に狂言の説明と写真が採録)	1

活経験の中
から」始め
ることも1
つの方法だ
と言える。

次に、ど
のような作
品が採録さ
れているか、
詳細を《表
2-①》《表
2-②》(発

展)のようにまとめた。採録されている作品は、短歌では、〈東の・・・〉(柿本人麻呂)が3社、俳句では、与謝蕪村〈菜の花や・・・〉が4社、松尾芭蕉〈閑さや・・・〉が2社である。これらを見てみると、もちろん作者や一部の作品への採録傾向は見られるが、小学校古典教材「短歌や俳句」において、5社全てに採録されるという定番は見られない。これは、

〔表2-2〕採録されている作品の詳細（発展）

短歌	・田子の浦ゆち出でて見ればま白にそ富士の高嶺に雪は降りける ・久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ ・あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいづ月かも ・いにしへの祭鳥のみやこの八重さくらけふ九重ににほひぬるかな ・春すぎて夏来にけらし白妙のころもほすてふあまのかぐ山 ・この里に手まりつきつつ子どもと遊ぶ春日はくれすともよし ・秋采ぬと目にはさやかに見えども風の音にぞおどろかれぬる	山部 赤人 紀 友則 安倍 仲磨 伊勢 大輔 持統天皇 良寛 藤原 敏行	2 1 1 1 1 1 1
俳句	・梅一輪一輪ほどの暖かさ ・目には青雲山ほととぎす初かつを ・雪とけて村いつばいの子どもかな ・名月をとつてくれとなく子かな ・やれ打な鍋が手を履足をする ・うまさうな雪がふわりふわり ・やせ鉄典けるな一茶これにあり ・しづかさや翁にしみ入るせみの声 ・古津や鮭煮こむ水のおと ・名月や池をめぐりて夜もすがら ・初しぐれ霽も小唄をほしげ也 ・夏河をこすうれしさよ手にざりう ・除にやんで夢は相れ野をかけぐる ・経顔につるべとられてもらひ水	原野 風雲 山口 鼎宣 小林 一茶 小林 一茶 小林 一茶 小林 一茶 小林 一茶 松尾 芭蕉 松尾 芭蕉 松尾 芭蕉 松尾 芭蕉 与謝 蕪村 松尾 芭蕉 加藤 千代文	1 1 2 2 1 1 1 3 1 1 1 2 1 1
狂言	・「清水」 脚本と説明 ・狂言の説明のみ ・「狂言 箱山伏」 脚本と説明が採録		1 1 1
物語	・「竹取物語」：「今は昔、～いとうつくしうてあたり。」 ・「平家物語（曹顯）」：「祇園精舎の鐘の声～塵に同じ。」 ・枕草子ものがたり 松居 匡		3 1 1
隨筆	・「枕草子（第一段）」：「春は、あけぼの。～白き灰がちになりて、わろし。」		1
漢詩	・春曉 孟浩然 ・春夜 蘇軾		1 1
講話	・子曰く、「放きを温めて新しきを知る。もつて脚と染るべし。」と。 ・子曰く、「学ひて思はざればすなはち罔し。思ひて学ばざればすなはち殆ふし。」と。		1 1

「発展」に採録されている作品においても同様である。
(2) 古典教材採録の意図
(1) で採録されている古典教材の詳細を見たのである

が、それらの古典教材がどのような意

図で採録されたかを本項では、特に5社の教科書教師用指導書¹²（以後、指導書と記す）から「短歌と俳句」を中心に見ていくこととする。

〔表3〕に採録の意図を整理してみた。短歌や俳句の1作品ずつの採録意図は記されていないが、小学生にとって「短詩型」であり、七五調のリズムが味わいやすく、かつ伝統文化に触れさせることができる短歌と俳句は最も適した教材であるとの考えが全体を占めていることが分かる。

〔表3〕古典採録の意図～「短歌と俳句」を中心に～

	1 東書	3 大書	11 学図	17 教出	38 光村
短歌と俳句単元の採録意図	・五年生も三学期になると、文学的世界への関心も高まり、学校行事で百人一首などに興味を持つ児童が見られるようになる。このような時期に、日本の伝統的な短詩型である短歌や俳句に触れ、言葉の微妙な意味、文章のリズムなどを感じ取る機会を設けたいと考えた。従って、本単元においては、短歌や俳句を読み味わい、そのリズムや季節感のある言葉に対する感覚をいかに育てるかが学習のポイントとなる。 ・身近な題材の平易な作品。	・（この時期）美しい日本語、正しい日本語への自覚が芽生え始める。本教材は、短歌と俳句の学習を通して、状況や作者の心情などを読み味わうことにより、人間の生き方や感じ方についての考えを深めたり、美しく正しい日本語への興味・関心を高めたりすることを意図している。 ・表現が比較的平易であり、身近な題材を扱ったもの。	・「短歌と俳句」は、「鑑賞詩」の例に属する学習教材である。詩の中でも「短歌」「俳句」は、我が国の伝統的な短詩型文学である。優れた描写や叙述を味わうとともに七五調の言葉のリズム、響きを楽しみながら学習させたい。 ・日本の伝統文学としての位置付けと古典への導入的役割を担っている。	・本教材で初めて日本の伝統的な短歌と俳句を学習する。長い歴史をもち、世界にも類がない日本独特の「詩」である。五音と七音を基に、日本語の響きや文語の調子に親しむには適切な教材。 ・川柳は、俳句と違って学語などの制約がないので、子供たちにも親しみやすく、制作にも取り組みやすい。	・日本の伝統的な文学ジャンルの中でも、短歌や俳句ほど古くから人々の生活の中に根づき、親しまれてきたものはない。（中略）日本の文化や伝統などに関心をもち、理解を深めることは、教育の大切な目標の一つであり、同時に、国際理解教育の一環域として、他者を知り、自己を知るために欠かすことのできないものということができる。このような日本文化への関心と理解を深めるとともに、言葉の含意性や象徴性に触れ、言葉の感覚を養うための教材として、短歌や俳句は最もふさわしい。

学校生活の中では5・6年生に限らず「俳句を創ろう」と投げかけることがあるが、

指折り「五・七・五」と数えながら創作する俳句が、実は「詩」の仲間であり、「日本の伝統文化」であるということは、児童にとって新たな発見であり、驚きであろう。とすれば、教育活動全体の中で、例えば俳句の創作活動をさせながら、それを文学として価値付け、伝統的な事柄を指導していくことは、古典をより身近に感じさせる一手法と考える。今後、学年に応じて、系統的指導を「短歌や俳句」の出会いから明確にすることによって、古典教材としてさらに生きた学習材となるのではないだろうか。

また、古典のリズムを体感するという意味においては、「行う」→「知る」→「深める」といった活動の中で学年枠を超えた取組も考えられるのではないだろうか。「行う」は、学年に関係なくとにかく古典に触れさせる。意味等は理解できなくても、先ず、音読したり視写、聴写したりしてリズム等の心地よさを体感させる。短歌・俳句を創作してみる。その後、発達段階に応じてその活動が、どのような意味を有しているのかを「知る」。ここで、古典に出会うのである。そして、今まで「行う」ことを重視していたことを今度は、内容的に「知る」のである。この場合、単元学習の導入も効果的であると考える。そのために、学校図書館や司書教諭の役割は大きいとは言うまでもない。そして「深める」では、作品が持つ意味や背景、日本の伝統文化との関連等で知識・理解を深め、思考・判断、表現といった力を育成していくのである。言い換えるならば、「興味・関心を高める言語活動」から「学年発達のねらいに応じた言語活動」を段階ごとに考えていけば、子ども達にも古典の学習が取り組みやすいものとなるのではないだろうか。そのためにも、学校の教育活動で行われる伝統文化（古典教育の観点を中心に）に関わる取組を整理し、古典教育とどのように関わらせるかを検討していくことも重要かと考える。

(3) 古典教材「短歌と俳句」のねらい及び提示の仕方

小学校古典教材として、5社ともが採録している「短歌と俳句」の学習でのねらい《表4》と作品提示の仕方《表5》をここでは見ていきたい。

《表4》「短歌と俳句」単元のねらい

	1 東書	3 大書	11 学図	17 教出	38 光村
ねらい	・短歌や俳句の形式を知り、季節感を表した表現を味わう。	・短歌や俳句の表現形式に関心を持ち、情景や作者の思いの描写を読み味わう。 ・声に出して読み、文語調の調子に親しむ。	・短歌と俳句について知り、作品の色彩感を味わうことができる。 ・七五調のリズムを楽しむことができる。	・解説を読みながら、短歌や俳句についての基礎的な知識を得て、実際の作品を鑑賞する。	・文語の言葉の響きやリズムや優れた表現に目を向けて、短歌・俳句を味わう。

「短歌と俳句」のねらいにおいては、「短歌や俳句」の特徴的な「表現形式」「リズム」を音読を通して味わうことが重視されている。そして、そのねらいに迫るために、単元の提示では、《表5》に示したような提示の仕方がなされている。

提示の仕方は、5社ともが『「短歌と俳句」がどのようなものかを説明→いくつかの短歌・俳句を掲載しその作品についての解説を付記→いくつかの短歌と俳句を解説なしで掲載』と

いう方式を採っている。では、提示されている本文は、どうであろうか。

《表5》「短歌と俳句」単元の提示の仕方

	1 東書	3 大書	11 学図	17 教出	38 光村
提示の仕方	①短歌と俳句の説明 ②短歌 ・〈東の・・・〉 解説 ・他5首 ③俳句 ・〈閑さや・・・〉 解説 ・他5句	①短歌と俳句の説明 ②短歌 ・3首 解説 ・他4首 ③俳句 ・3句 解説 ・他4句	①短歌と俳句の説明 ②短歌→俳句→短歌→俳句の順で1作品ずつ採録、解説が付記。 ③俳句他1 短歌他2	①短歌の説明 ②〈石走る・・・〉 解説 ③短歌の説明 ④〈古池や・・・〉 解説 ⑤短歌と俳句の説明 ⑥家族をうたった作品 短歌他3 俳句他4 ⑦自然をうたった作品 「富士山」「野」「春」「秋」のテーマで短歌と俳句1作品ずつ提示 ⑧川柳1句提示し、川柳の説明 他3句 ⑨文語の説明	①短歌と俳句の説明 ②短歌 ・〈石走る・・・〉 解説 ・〈秋菜ぬと・・・〉 解説 ・短歌の説明 ③俳句 ・〈五月雨を・・・〉 解説 ・〈菜の花や・・・〉 解説 ・俳句の説明 ④短歌他4首 俳句他4句

補:「他～」という表記は、作品のみ掲載という意味を示す。

次のような文言が見られる。

- ・[東書]:「好きなものを選んで覚えましょう。」
- ・[大書]:「くり返し声に出して読んで、そのリズムやひびきを味わいましょう。」
- ・[学図]:「色彩的にあざやかな作をしようかいしましょう。(中略) みんなで調べてみると、きっとおもしろいでしょう。」
- ・[教出]:「家族をうたった作品(中略)自然をうたった作品を読んでみましょう。
:「短歌や俳句で大事なことは、声に出して読むことです。(中略) 気に入った作品を、暗唱し合ってみましょう。」
- ・[光村]:「声に出してくり返し読み、それぞれの作品のおもしろさや味わいを探ってみよう。あなたは、どの作品が好きですか。」 (波線は、筆者)

内容を見てみると、[学図]は「色彩」、[教出]は「家族・自然」といったように、作品をテーマで捉え提示を焦点化したものもある。また、内容の波線部分を見てみると、「味わわせる」手立てとして、作品の大筋を捉えた上で、先ず、多方面から作品にアプローチすることに重点が置かれている。そして、学習者が「調べる」「暗唱」「好きな作品の選出」等によって主体的に作品に迫り、そこからさらに自力で学習材発掘へ向かうように構想されているのである。それは、単元の配列にも見ることができる。5社とも、指導書の中では「短歌と俳句」の単元を単独としているが、その前後の単元(教材)の配列を《表6》に示した。

[大書][学図][教出]に見られるのは、「短歌と俳句」の学習の前に「読書」が位置付いているということである。これは「短詩型文学」に触れることによって、読みの幅を広げることにつながると思われる。また、[大書][学図][光村]は、「短歌と俳句」の学習の後に、「言語」に関わる学習を位置付けている。[大書]の「みんなの詩」の中には6年生が創作した俳句があり、創作したり批評したりする学習活動が設定されている。[学図]の「言葉のおもしろさ大研究」は、普段何気なく使っている言葉を考えさせる単元が位置付

いており、「ことわざ」について調べる内容が掲載されている。同様に〔光村〕の「くらしの中の言葉」にも、ことわざに触れる学習が掲載されている。

《表6》「短歌と俳句」の前後にある単元（教材）

	1 東書	3 大書	11 学図	17 教出	38 光村
単元構成	<ul style="list-style-type: none"> ◆身近な生活について討論しよう ・インスタント食品とわたしたちの生活（説明文） ◆短歌と俳句を味わおう ◆表現のおもしろさを考えよう ・注文の多い料理店（物語）（宮沢 賢治） 	<ul style="list-style-type: none"> ◆筆者の考えの述べ方に着目して読もう ・川の自然（説明文） ・インタビュー ・地球環境を考える ・教語 ・本の世界で学ぼう ◆短歌と俳句 ・みんなの詩 	<ul style="list-style-type: none"> ◆本の世界を広げよう ・夢に向かって（伝記） ・読書案内 ・読書会をしよう ◆読書読もう ◆短歌と俳句 ・言葉で遊ぼう ・コミュニケーション ◆知ろう・伝えよう ・言葉のおもしろさ大研究（書く） 	<ul style="list-style-type: none"> ◆新しい世界を求めながら読もう ・ぼくの世界、きみの世界（説明文） ・読書の広場 ・新しい世界と出会う ◆言葉と文化 ◆短歌と俳句 	<ul style="list-style-type: none"> ◆文章を読んで、自分の考えをもとう ・生き物はつながりの中に（説明文） ◆短歌・俳句の世界 ◆くらしの中の言葉（言葉）

短歌や俳句によって、日本語のもつ味わいを学習するのであるが、その延長線上に、言葉の美しさを考えさせたり、ことわざなどの昔の事柄に触れさせたりすることによって、より言葉の重みや深まりを学んでいくことができるのではないかと考える。

単元を構想するとき、その中で何を学ばせるのか、さらに、前後の単元や教材をどのように配列して学習効果を上げるのかを考えることによって、より楽しい学習になるのではないだろうか。他のジャンルの学習においても大切であろうが、より文語調という抵抗のある古典学習において、「言語活動」の充実を図ることは、内容的に深める中学校との学習内容の連携という面においても大切になってくる。加えるならば、先にも記した「学習者主体の学習展開」において、短歌や俳句の学習で、子ども達が興味・関心を持った作品が数多く授業の場に登場しているであろう。それを一度整理、分析することによって、子ども達に受け入れられている要因を見出し今後の教材開発に生かしていくのもよいのではないだろうか。また、教師と共に子ども自身が教材開発に参画するのもおもしろいと言えよう。そこで、次の項において、古典教材の学習と関連付けることができる教材について見ていくこととする。

3 古典教材との関連を図る教材のあり方

本項では、教科書教材を「古典教材との関連を図ることができる教材」という観点から見直し、その系統性を見ていくものである。古典教材として関連を図ることができる教材を《表7》のように整理してみた。第1学年から、5社の傾向を見ていくこととする。

まず、5社共通に見られるのが、第1学年の導入段階における「読書」、主に「読み聞かせ」に関わる内容である。この単元には、「うらしまたろう」等の「昔話」へ誘う挿絵が位置付いている。前述した大平の文言を借りるならば「小学校の国語科で、児童向けに書き直した説話や物語などを教材としてたくさん読ませ、古典の世界に親しませるべき」活動が「読み聞かせ」という言語活動として位置付けられているのである。もちろん、この段階では、本に興味を持たせ、読書する楽しさを味わわせる単元ではあるが、この導入段階で教師が意

図的に「説話・物語・民話」等を紹介することによって、自ずと古典を読むことにつながり、ひいては、日常の読書生活での古典学習につながっていくものとする。

《表7》古典教材との関連を図る教科書教材

	1 東書	3 大書	11 学図	17 教出	38 光村
1 上	◆既書	◆既書	◆既書	◆既書	◆既書
2 下	◆昔話 かさこじぞう ◆「させつの悪い出ブック」 を作る	◆民話 かさこじぞう ◆「発見」 ・歌や時の視写	◆物語 かさこじぞう	◆童話 かさこじぞう	
3 上	◆「付録」落語 じゅげむ ◆「付録」させつ				◆昔話 聞き耳ずきん
3 下	◆つな引きのお祭り ◆想ぞうしたことを書く	◆民話 やまんばのにしき	◆年の始まり		
4 上		◆民話 吉四六さん		◆昔のことを調べよう	
4 下	◆くらしの中の和と洋			◆アーチ橋の仕組み ◆落語 ろろろ ◆「便利」について考える ◆「発見」落語 舞限無	
5 上					◆言葉の研究レポート ◆千年の釘にいどむ ◆「発見」言葉
5 下	◆昔話をしようかいしよう	◆伝記 ◆「発見」 ・昔の仮名づかい	◆和紙の心 ◆ことわざ・故事成語 ◆慣用句とことわざ ◆「発見」落語 ◆「発見」 ・ことわざや慣用句	◆ことわざ ◆「発見」仮名づかい	
6 上	◆ことわざや昔の言い方		◆ことわざ・慣用句		◆ことわざ
6 下	◆感動をリズムにのせて	◆時空をこえて ◆言葉文化を受けつこう ・落語の招待席 ・語りにもちよう歌しよう	◆「発見」 ・季節の言葉集め	◆日本語の文字	

第2学年では、4社に「かさこじぞう」が採録されている。昔話へのアプローチは、日本人のものの見方や考え方、あるいは当時の生活の様子を間接的ではあるが、捉えることができる。古典という意味において、学習の中で触れていくことができれば、昔話や民話等の読み方を身に付け、その楽しさを感じていくのではないかと考える。同様なことが、学年は違うが4社が採録している「落語」においても言えるのではないだろうか。本来「落語」は聞くものであり、話すものではあるが、言葉が発する楽しさとともに、「古典落語」として、日本の伝統的な芸術につながる。それを、教材化することによって、興味・関心を持って昔の人の生活に親しむことができるであろう。もちろんこれらは、古典そのものではないが、古典学習に迫る手立てとして、古典に近いもの、日本人のものの見方や考え方に迫ることができるものとして幼時期から触れさせておくことが日常化すると考えるのである。

また、ことわざや故事成語といった日常使われているものから古典に迫る教材、季節や季節の言葉に目を向け日本人の季節感や言葉の巧みさを捉えさせる教材、文化を考えさせることを通して昔の人の生活を理解させる教材、昔の人の伝記を読みその生き方を考えさせる教材等々の中で、日本語のあるべき姿、日本人の生き方、ものの見方や考え方、そして、伝統文化を尊重する姿勢を養っていくことができると考える。

このように、「短歌と俳句」を中心に、古典に迫る教材が「発展」も含めて各学年にちりばめられている。これらを結び付け、単元を構想することが、古典教育を充実させる足がかりとなるのではないだろうか。

おわりに

以上、2005年度版小学校教科書を中心に古典教材採録のあり方を見てきたが、今後古典教育の充実を図るために、古典教材において考えておくべき事柄を述べて結びとする。

- ・現在掲載されている教科書教材や学習材として活用した作品等における子どもたちの意識調査
- ・子ども達の生活経験を生かすことができる教材の開発
- ・身近な民話や物語からの教材発掘
- ・古典以外の教科書教材と古典教材との関連付け
- ・古典教材の単元配列と言語活動の具体化

《引用文献》

- * 1～3：文部科学省『小学校学習指導要領解説国語編』東洋館出版 1999.5
- * 4：日本国語教育学会『月刊国語教育研究No.335』1999.3 p30
- * 5：日本国語教育学会『月刊国語教育研究No.345』2001.1 p1
- * 6：中日新聞 2006.8.19版より
- * 7：東京書籍株式会社『新編新しい国語』2004.2.10 検定済
：大阪書籍株式会社『小学国語』2004.2.10 検定済
：学校図書株式会社『みんなと学ぶ 小学校国語』2004.2.10 検定済
：教育出版株式会社『ひろがる言葉 小学国語』2004.2.10 検定済
：光村図書出版株式会社『国語』2004.2.10 検定済（5社の教科書は1年～6年活用）
- * 8：国語教育研究会『国語教育研究大辞典』明治図書 1988 p359
古典教材の定義について、次のように記されている。
「狭い意味では、中学校・高等学校の国語教材で現代文とともに主要な分野をなす『古典としての古文・漢文』の教材をいう。（中略）高校の『学習指導要領』では、古文教材の範囲を、『原則として、江戸時代までのものとする』ことを明示していた。古文では、原文のほか現代語訳、漢文では、訓読漢文のほか書き下し文・現代語訳のものを含む。また、古典についての鑑賞・解説文を含めることができる。広い意味では、小学校などでの、古典としての神話・伝説・物語などに取材した説話・物語を含む。（中略）教科書に古典としての詩歌作品などが採られていることがある。」
- * 9：新編新しい国語編集委員会『新編 新しい国語 教師用指導書 研究編』東京書籍 2005
- * 10：指導書編集委員会『小学国語 教師用指導書』大阪書籍 2005
- * 11：学校図書株式会社『みんなと学ぶ 小学校国語 教師用指導書解説編』学校図書 2005
- * 12：教育出版株式会社編集局『ひろがる言葉小学国語 教師用指導書研究編』教育出版 2005
：光村図書出版株式会社『小学校国語学習指導書』光村図書 2005

（*12は、*9～11以外の指導書）